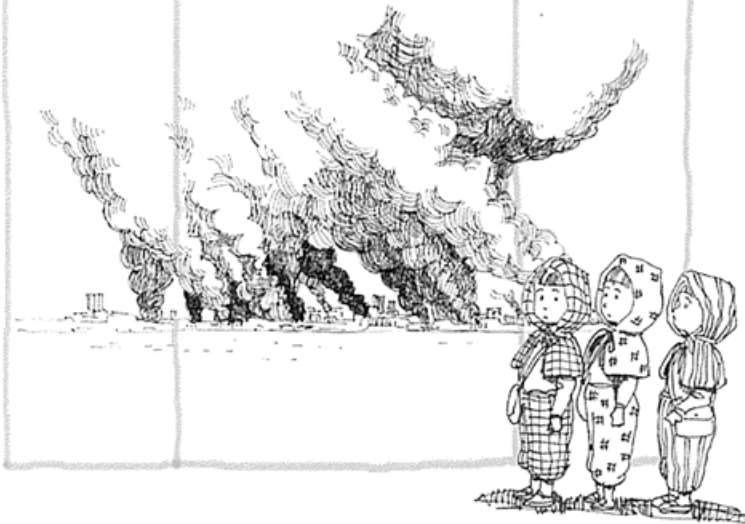


第三部

座談会



戦時下の同級生と先生

場所：生涯学習センター

(過去帳を抱えて逃げた)

女A・・昭和十六年、父が亡くなった後、古い過去帳はボロボロになりましたが、空襲の時は品物や何かついでというよりも過去帳の方が大事だったので、これを背負って逃げましたね。

男A・・私は、牛込で昭和十六年に小学校に入学し、小学校の四年生の頃、縁故疎開で仙台に行きました。当時、教室の中では、防空演習で先生が合図するとみんなが机の下にもぐって、目と耳を両手で塞いでうずくまりなさいっていう演習をしていました。そんなことを、今思い出しますね。そういうことが實際役に立ったのかどうかは、疑問です。でも、鮮明に覚えていますね。

女C・・私はやりましたよ。

男B・・私はやらなかったです。私は空襲で逃げた話をします。何月だったか忘れましたが田村町に住んでいて、焼夷弾が落ちてきて火事になり日比谷公園に逃げたんです。逃げる途中、一丁目の交差点を、赤い消防自動車が二台か三台、皇居のほ

うへ走って行きました。周りがみんな火事で焼けているのに、消防自動車がいったいどこへ行くのだろうと思って、それがちよつと不思議だったのですが。あとで考えると、皇居を守りに行ったのでしょうかね。あくる朝、ようやく火が消えて、家へ帰ってみると、金庫が一つぼつんと残っていました。大きい金庫でしたけど、いつもコップに水を入れておいたのですが、開けてみると、コップの水が空っぽになっていましたね。書類は何ともなかったです。

女B・・新橋方面は日比谷公園に逃げて、田村町方面は芝公園へ逃げましたね。

女E・・夫の母は日本橋北新堀町に家があり、昭和二十年三月十日の早朝、空襲警報と同時に、玄関にあったお雛様とかの荷物を防空壕に放り込んで、夫の父は飛び出して行ったそうです。一方母は、十三才の長女と五才の三男の手を引いて、二才の四男をおぶって、逃げました。長男と次男は、縁故疎開に行っていたそうです。火の粉を避け永代橋隣の倉庫の脇から船に移りまして、隅田川へ避難しました。母は三十五才でした。何隻もの船に火の粉が燃え移り、我慢できなくなつて多くの人が川に飛び込んだようです。母も子どもたちを抱きしめて、ただひたすら「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えていたようです。もうこの船に火が移りだし、何人も

の人が隅田川に飛び込み、「もう駄目だ」と母も悟ったそうです。その時、突然船が燃え残った蒸気船に引つ張られて、川上の豊洲橋方面に向かい、それで命が助かったと言っていました。でも、荷物も家も、灰と化してしまったそうです。

男E..私の家は強制疎開で壊されました。慈恵病院の延焼防止のためでしたが、壊し方も乱暴で、下の柱を切りまして、土台の所に縄をかけてみんな「おーい」って気合かけて引っ張ると簡単に壊れるんですよ。四軒長屋でしたけど簡単にひっくり返ります。四月十五日の空襲で壊した家の材木も焼けてしまいました。その後何回か空襲にいましたが、だんだん度胸がついて「おお、きれいだなあ」とか言って（笑）。

五月二十五日の空襲は、私が受けた一番大きい空襲でした。山王神社も焼けました。あの時は飛行機が五百五十機、麹町から青山、赤坂、渋谷、新宿、全部焼けました。学校に行くとか赤坂見附でたくさん死んでいましたよ。今でもあの場所はいいい気持ちはしませんね。弁慶橋の方に逃げたから助かったけど後ろを振り向いたら、炎が地面をはっていったという人もいました。熱気で空気がなくなり、炎が風で吹き込むから道路の真ん中にいた人が焼けてしまうのです。一人ね、畳を背負って死んでいる人がいました。畳を背負えば、炎が防げると思ったのでしょうか、畳をどけると半分生の人間で、半

分はもう炭ですよ。あれ見た時は、「アメリカの奴、むごいことをしたな」と思いました。アメリカが上陸して来たら、竹やりで刺してやるなんて言っていたのですが、終戦になって、アメリカ兵が来た時には、あまりの格好の良さに、すっかり戦意もなくなりましたけどもね。

女C..私は昭和十八年に一年生に入学し、学校に行って毎日やっていたことは防空壕に入る練習でした。桜田小学校で、コの字型に校舎が建っていました、一年生用の防空壕は、地下室で、壁が真っ白に塗ってありました。綺麗な防空壕でしたね。工作室の下ですね、そこに毎日一年生は入って、目と目に手を当て、伏せる練習をしました。兄などの高学年は、東屋みたいなのがありましたね。

東屋の土手になっている所にみんな、目と耳を隠して伏せる練習をしたそうです。私が一年生に入学した時には、衣類や食料品は全部切符制だったと思います。ですから、甘い物は何にもありませんし、一年生の遠足も日比谷公園で、氷砂糖が配給になりました。券をもらい、それを持って行って菓子屋さんに並び、小さな氷砂糖の余り入っていない袋を頂いて、遠足に行った覚えがあります。二年生になって、茨城県の間間に縁故疎開をしました。そこでもまた空襲にありました。茨城県は、日立の工場とか土浦の飛行場を抱えています。

したので、目標になりましたね。一緒に疎開していた母が、食べる物がなかったので、小山とか古河まで買い出しに行っても、かぼちゃしか売って貰えなかったらしく、お金では売ってくれずに着物を持って行くのです。買い出しの帰りに古河の駅で艦載機に狙われたそうです。かぼちゃを背負って、「駅の陰に逃げて助かった」と言って帰ってきたのを、もう家中で喜んで、ほんとに抱き合ったのをかすかに覚えています。だから、田舎でも疎開者は食べる物には大変に苦労しました。

女B・・学童集団疎開でね、東武電車で行きました。

男D・・帰って来たのが昭和二十年の春ですよ。

男E・・鬼怒川では飛行機を見ませんでした。東京へ帰って来て二日目くらいに空襲になり、B29を初めて見て、びっくりしちゃってね。それで防空壕にも入りました。私の家は、南桜小学校、今の日比谷通りの向こう側で八百屋をやっていた。

女C・・私も父と兄がね、家が焼けちゃったといって茨城県に行きました。私の誕生日に焼けちゃったので、小さい子どもながら覚えているんです。

男E・・親戚の人が浅草にいまして、三月十日の東京大空襲で私の家に逃げて来たんです。顔が腫れちゃって、煙にやられて、ほうほうのていで逃げてきました。そうしたら今度四月

の空襲で私の家が焼けて親戚の人たちと一緒に裏の通りを逃げて、汐留の裏、国道の近くの防空壕まで行きました。一晩たって、帰ってみると家が焼けてありません。全て焼け野原です。両親とはその時別々でしたので、桜田小学校に行って見ました。そうするとすでに避難してきた人がいっぱいいて、両親を見つけお互いの無事を確認しました。それが最初に焼けた時で、無事だったその近くの人にお世話になっていましたら、その家も焼けてしまいました。それから今度は、新橋五丁目、桜田小学校のすぐ側の八百屋さんにお世話になりました。そうしたら、そこもやっぱり焼けたんですよ。で、最終的に、もう自棄になって、死んでもかまわないと、空襲でも防空壕に入らないでいました。そんな経験をして、それからだんだん火事に慣れてきちゃって、ちよつとやそつとの火事じゃ驚かなくなりました。そういう経験があります。

（疎開先での子どもの苦労）

男C・・昭和十九年、私が小学校六年生の時に疎開したのです。

男C・・私は母親の実家、埼玉県の利根川の手前の栗橋という所に疎開しました。父親だけ残っていました、私の兄弟が五人いるわけですけど、それで母親と小さい一軒家を借りました。

男E・・私ね、疎開して一番びっくりしたのは、六年生の仕事

でトイレのくみ取りをやったことですね。それを、学校の農園でまくのです。こっちは転んだら大変だから必死になりましてね。そんなのを一回、二回やっているうちにだんだん慣れてきて、まあ、どうってことなくなりましたけれどね。でも、何でもやっておくのが役に立つと思うのは、終戦後、バラックを建てて暮らした時に、なかなかくみ取りに来てくれない時に夜中に自分でくみ取り、道路の真ん中のマンホールの蓋を開けて捨てましたけど、慣れで苦にならなかったことですかね（笑）。

女B..六年生を卒業させるので二月に帰って来て、新二年生たちを連れて行くのに、家の荷物を出すため用意したら空襲で焼けてしまい、しょうがないから、ある物だけ持って連れて行きました。疎開地に行ってから、兄弟のいる人から布団を一枚ずつ借りて来て、足りない分は宿から出してもらって、シーツ等は古い物も出してくれました。下着でも縫って作って下さいって、宿のご主人が出してくれたのを、寮母さんが型紙を取って、着替えを縫ったんですよ。

女C..あの頃帰って来た人たちは、卒業式もできなかったわけですよ。

男C..米が足りないので先生が「粟を拾って出して下さい、ご飯に混ぜて炊きます」と言うんですけど、生徒がみんな食

べちゃってないんですよ。みんな食べてしまつて。

女B..温泉の出口にぶら下げて。

男C..いや、温泉よりね、線路に、引かしちゃうの、電車に。ところが便秘しちゃうのね。糞詰まりになっちゃうの。それで、整腸剤を飲むと、余計にお腹がすいちゃう（笑）。

女B..あの頃は、胃腸薬をお菓子代わりに食べたね。

男C..歯磨き粉を、夜中、お布団の中で食べていたって言っていましたよ、

女C..女の子はお手玉の中にね、お米を炒って入れてもらうんです。それをね、みんなでお布団の中で食べるんだって。

男C..だつて行った時に、先生にお菓子みんなとられちゃうんだもの。それでみんな泣いちゃった。

女C..小さい子から泣き出すんだって、そうすると全員泣いちゃう（笑）。

男E..恨み骨髓（笑）。

男D..やっぱり食糧難だからこそですよ。

女D..帰って来た時はほんとに、みんな栄養失調でしょ。

女C..歯茎から血が出るのは栄養失調でしょうねえ

女B..でも、その時は、ほんとにそれぞれが切羽詰った状態で、皆さんを親から託されていたわけですよ、ご両親に悲しい思いとか、辛い思いをさせたくないっていう気持ちにはあ

ったと思うんですね。インフルエンザみたいな風邪で、鬼怒川館中風邪ひきになってね。看病に来てくださったお母さんまでが、みんな、氷枕でした。外には雪がいっぱいあるでしょ、氷があるでしょ、それを持って来ちゃあ洗面器にいっぱい入れて。そして、大広間にみんな、布団をひいて寝ました。そういうこともありましたから、やっぱり子どもの命っていうのは、親はもう。

男B..虱(しらみ)とノミとねえ。もう最悪だけど、でも今にして思えばよく生きていたなあと思いますね。ほんとに最悪の状態だね、もうお米の配給がない時は小麦をそのまんまご飯に、お米と半々ぐらい炊き込んだので、トイレ行くとみんな小麦がそのまんま粒のまま出て。

女E..私は、滋賀県の米原の醒ヶ井という、東海道沿線の中山道沿いにある町で生まれ、冬になると伊吹山からの冷たい伊吹おろしが吹く寒い町でした。当時、私は小学校二年生で家では商売していましたが、農業の盛んな田舎でも食料不足で、商品を農家に持って行って、お米や麦、野菜などと交換してきました。その小麦をうどんに取り替えてくる係が小学生の私でした。今から思えば、三升から四升、何キロも袋に入れて四十分程汽車に乗り、うどんの製麺所まで行きまして、何時間も並んでやっこの思いで交換してもらいました。その

時の誇らしさ、嬉しさは忘れられません。

戦後は不景気で、店もやっていけず、姉と二人で自転車いっぱいに反物を積んで行商に出ました。中には代金代わりにお米で支払う人もいて、全部売れるともう本当に、歌声です(笑)。声高らかに自転車を飛ばして帰ったりしましたよ。田舎道は今みたいに街灯がありませんから、真っ暗になると見えませんから、蛇ちゃんを踏んでいたこともあります(笑)。

第三部 (座談会)

空襲と疎開の思い出 (語り部の会)

場所：生涯学習センター

(疎開と空襲の思い出)

女A..私は、当時西久保巴町から都電に乗って神明小学校へ通っていました。愛宕山のトンネルの所に避難していましたが、新橋の方から燃えてきて南佐久間町が燃え出し、トンネルの入り口の所から、火が吹き出し、いつも利用している神谷町の駅がもうほんと火に包まれていました。両脇から炎が出て、都電電車の電柱が鉄だったのですが、鉤の様に曲がって、ピューピューとね、「まあ、なんて綺麗なんでしょ」と思っ見てとれていたら、その炎の中から、逃げて来る人もいました。火に追われて神谷町の方を見た時、ぽーっと熱い風が来るんですよ。寒い日なのに、ほったが熱くなるぐらいの炎に追われてね。暗い所に逃げよう、暗い方に逃げようって、みんながゾロゾロゾロ歩いて、たまたま行った所がアメリカ大使館の前だったのです。ちょうど、それが三月十日の日でした。

先生..その十日の空襲を経験して、十九日に学童疎開で鬼怒川へ発ちました。

女B..アメリカ大使館は焼けなかったですね。

男B..アメリカ大使館もオランダ大使館もちゃんと残っているんですけどね。

女B..あの界限ね、五十メートル、百メートル範囲は一切落ちないんですよ。だからけっこうアメリカ大使館の先にも外国の大使館ありましたし、手前が大蔵省でしたからね。逃げるならあそこしなくて。避難していました。

先生..芝浦の方で、やはり終戦の時に、燃えているのをご覧になっている同級生がいらっしやいます。

女B..芝浦も凄かったですよ。

女B..戦争中に親の都合で、疎開に参加しなかった子どもたちが東京に残っていたんです。学校が軍隊に占拠されたり、いろいろな団体が入ったりして学校が使えず、神社の境内とかお寺さんの本堂とかを教室として使ったのです。集団疎開の私たちも青空教室みたいなものでしたよ。地元の小学校は使わせてもらえなかったもので、警戒警報が鳴ると教科書を持って山に逃げ、木の切り株に座って、教科書を読んだり先生がお話してくださったりね。それが青空教室だったと思います。

女B・・笠間の旅館に疎開してきた方たちが、地元の小学校に、時々皆さんでいらっしゃいました。それで、スポーツ大会をやったり、慰めの会みたいなことをやりましたねえ。

女A・・疎開組としては、地元を受け入れてもらえなくて、地元の生徒たちがいない時に、少し遊ばせてもらうと言うことが、一、二度あったぐらいで、ほとんどなかったですね。地元の学校の教室を、使わしてもらったという記憶もないです。だから、一番印象に残っているのが、山へ逃げた時に先生がお話してくださったお話を、今でも鮮明に覚えております。ですから、空襲警報が鳴って山の中に逃げるのが嫌じゃなかったですね。今でも、山の中で先生がしてくれた『安寿と厨子王』とか、あと『ヤマトノオロチ』の話とかたくさんしてくださいました。

女B・・地元の学校も縁故疎開で来ていますからね、校舎は大入り満員です。三年生なんて一番隅で、教室に入れなくて、空襲警報でも私たちのクラスだけ残っちゃった。だから敵機が空に來ている時に、私たちは桑畑を這いずり回って帰ったことを、思い出します。焼夷弾だとか爆弾が落ちて、後で行って調べたら、弾がそのままお寺に残っていましたね。お墓の石が削られた所とかの跡も、残っていましたからね。男の

子は飛行機に乗っているアメリカ兵の顔を見たと言っていましたね。茨城県は、日立だとか土浦がありましたから、やっぱり狙われたみたいです。

男B・・茨城は艦砲射撃でずいぶんやられたんだよね。

女B・・日立は艦砲射撃で。土浦は予科練があったから。

先生・・港区も軍隊があったので、機銃掃射をやられた跡がありますね。

(終戦の思い出)

女A・・八月十五日の終戦の日は、栃木県の鬼怒川温泉に学童疎開で行っておりました。私たちは、三年生だけの小さな旅館で玉音放送そのものは聞いておりません。ただ、絶対部屋から出ないで待っていないさいって言われました。近くの一心館って所に神明小学校の本部がありまして、四年生以上は全員そこに集まって玉音放送を聞くということでした。とにかく、町中っていいいますか何一つ音がしなくてシーンとして、みんな生きていないんじゃないかと思ったのが、八月十五日の私の体験です。後から、先生が「日本が負けて、もう戦争はない」ってことを伺って。私はただ、これで東京に帰れると思ったことが、その日の思い出です。

女B..私も、小学校三年生で、母と兄弟と茨城県の笠間町という所に縁故疎開していました。疎開先の家にラジオがあり、まだあまりラジオがない時代でしたので近所の方がみんな集まってみました。私は、大人の中に混じってグワーグワーと言う雑音の中で、天皇陛下のお言葉をかすかに聞いたつていうような感じです。女の人たちは泣いたりしておりました、「負けたんだ」と大人の人たちが口ずさんでおりました。やはり、みんな静かでしたね。

ちようどお昼だったので放送が終わり、ほんとに箸が立つか立たないかのようなさつま芋の入っていたお粥を、「箸が立たないね」と言いながら、みんなで食事をしたことを覚えております。その後色々、アメリカの人が茨城県で海がそばでするので、上陸してくるのじゃないかと、そういうような大変不安な思いをしました。

男A..八月十五日は、ずっと帝都を守っていました。家が丸焼けで、父が電信柱が半分くらい焼け残ったのを四本切ってきて柱を建て、その上に焼けたトタンを乗つけて、そこへ住んでいました。玉音放送は、隣の家がたまたまラジオ持っているとして、みんな聞きに行った覚えはありますが、放送の状態があまり良くなく何を言っているのかよく意味が分かりま

せんでしたね。その内に、キーンっていう音がして米軍の戦闘機が一機、上空をぐるぐる回り始めました。何で日本の軍隊が撃ち落さないのか、それが不思議でならなかったです。

女C..私は、昭和十九年の三月に結婚し、夫が三度目の召集で鹿児島へ行っていて、家には母と焼け出された近所の人と一緒に住んでおりました。八月十五日の玉音放送の時間は、隣の家で三味線を弾いている時で、「何でそんなことをしている」って言われて、始めて戦争が終わったことを知らされました。その後で、何回も何回も放送されたのを聞きました。

男B..玉音放送を聞いたのは新宿御苑の近くの千駄ヶ谷で、当日は物凄く天気が良かったという記憶があります。当日か翌日かよく覚えていませんが、日本の飛行機が上空を飛びましてですね。徹底抗戦のことを、まだ日本は降伏していないんだという、ビラを拾った記憶がございます。ポツダム宣言そのものはですね、ポツダム宣言を受諾したというチラシが事前に米軍機でまかれていたので、もうすぐ終戦だという感じはありました。

男C..私は小学校の五年生でした。宮城県の仙台市の郊外に住んでいました。個人的な疎開で、終戦の天皇陛下の放送については、皆さんと同じで、何を言っているのかよくわかり

ませんでした。私が住んでいた家に小さい庭があり、その夏はかぼちゃがとでも沢山取れたっていうことを覚えております。戦争については非常にうっすらとした記憶しかありませんが、そのことが強く印象に残っております。

男D・・私は、確か学童疎開から帰って来まして、学校のすぐ側の今の新橋三丁目ですか、そこで玉音放送を聞いたと思います。十五日に限っては特に記憶がないんです。たぶん両親と一緒に、バラックを建てて戦争中から住んでいましたので、ただ皆さんが言われているように、ラジオはビービーガーガー、古いラジオですから、何を言っているのか分からないということくらいですね。内容については分かりませんでした。先生・・子どもたちと一緒に一年半程鬼怒川へ学童集団疎開していました。ちょうど八月十五日の時には、一年生を受け持っております。確か十五日は、職員室にしかラジオがなく、疎開先の旅館は一階から八階に分かれて各部屋に子どもがいたので、先生方だけが職員室に集まって玉音放送を聞いたと思います。とにかく、山の中ですからねえ。電波がきちっと届いたり届かなかったりするような状態で、はつきり聞き取れません。終戦ということは分かりました。各部屋の寮母さんに報告をして。ショックを受けたまま子どもたちの前に

立った記憶が印象に残っております

女E・・私は、終戦の時は小学校二年生でした。滋賀県米原市醒井の中仙道沿いの商家に生まれました。名古屋から引越してこられたご一家が、玉音放送の時に家からラジオを表に出して、大きな音で流されたのを覚えております。だけど、人っ子一人通らないって何か凄い……。凄いお天気だったんです。蟬の声だけがミンミンミンミンいってまして、そんな時に、天皇陛下の初めてのお声を聞きまして、子どもながらに、親に隠れるようにそれを聞いていた覚えがあるのです。それと、玉音放送と同時に頭に浮かぶのは、東の空が真っ赤なんです。それで「大垣がやられている」って、父が言っていました。それが玉音放送の後だったように思うのです。終戦後に、本当に空襲があったのかなあと思ったりもするのですけど、その二つが印象に残っています。

男E・・当時、私は中学一年生で、母親と他の兄弟は疎開しております。私と父親と二人田村町で暮らしていました。住んでいた家は強制疎開で壊されたので、他の空き家で暮らしていました。終戦の時裏の家に聞きに行ったのですが、ピーピーピーいっているばかりで、何を言っているのか全然わかりません。「何を言っているのだろうね？」って、「ロシア

と戦うから、国民はもう一回覚悟を新たにしろ」っていつて
いるなど勝手な想像をしていました。それが終わり十分ぐら
いすると「負けたって言っているらしいよ」って話になりま
して、「あ、そうか」ということになったのですが。あの日は
青空が透けていましてね、そこに飛行機が飛んできました。
その飛行機は海軍の飛行機で、ビラを落としまして、”我が隊
は徹底抗戦する”なんてビラが空からバラバラと落ちて来ま
した。それから一番印象に残ったのは、表に出ましたら若い
海軍の将校が、泣きながら来たんですね。憧れの海軍の制服
を着た立派な青年が、泣きながら歩いていたのが今でも一番
印象に残っております。その後、アメリカ軍が進駐して来ま
した。町会に十字路がありまして、みんなを集めて、町会長
が「今、警察から連絡が来ました」と。「明日、この日比谷通
りを進駐軍が通るから、みんな絶対表には出ないように、特
に女の人たちは、目につくようなことがないように隠れてい
て下さい。」と言われました。私は日比谷通りに面している二
階の窓を少し開けて見ていました。鬼畜米英と言って、アメ
リカ兵やイギリス兵は、獣みたいなものだと思っていました
がそのジープで来たのは、何と格好のいいこと。おかしいな
あと思ったものです。ジープが何台も何台も来まして、綺麗

な模様の腕章ですよ。どうも日本の陸軍とは全然格好が違
うのですね。戦争が終わるまでは、子どもでも竹やりを作り、
これで一対一で刺すのだという相手が、あんまりにも格好が
良くて、すっかり戦意を喪失したことが、思い出されます。

（教科書への墨塗りの思い出）

女B..先生が何ページのあれを塗りなさいと言って塗しまし
たね。教科書の桜の花まで塗ったような覚えがあります。あ
と、刀だとか戦争なんていう言葉はみんな塗りました。だか
ら、教科書がほとんど黒くなりましたよね。

男E..教科書ですけども、国語なら国語の教科書、何ペー
ジの何行目から何行目ってとこ、まずチェックするわけですね。
それで帰ってきて家で消すのですけど、その作業が、何日も
かかりましたですね。それから、国語、歴史は塗る所が多い
ですから、全部消しますから、残ったのがほとんどなかった
ですね。

先生..国史と地理はね、強行停止になったんです。上から、
そういう指示が来ました、そのとおりにしないと授業ができ
ないわけです。あの時はそうせざるを得ないし、教科書は、
国語がほとんどで後はもう使わなかったでしょ。国史や地理

の教科書は全然使わないで、ガリ版刷りのわら半紙のようなのを四つ折にしたのが配られて授業をしました。

女B..印刷した紙は裏と表の字が透けて見えるような紙でしたね、それを自分で綴じるんです。そんな紙で、勉強をしたかも知れない。

私も、四年生の半分学校を休んでいました。その間、先生がガリ版刷りで算数と漢字の勉強だけで、他のものは一切授業はなかったでしたねえ。

男D..教科書も今日はこれだけと、その日使うのを貰いました。

男E..一枚ぐらいだなあ。

男D..そうですね。で、それが終わる頃にまた次のが来るわけです。

女C..それも少しの間でした。その内に年度が変わって教科書が出来てきたから。

女B..あと、お通信簿の後ろに色々先生が書いてありますよね、あれまで墨で塗りました。

先生..今のように筆ペンじゃないですよ、ちゃんと墨を擦って水を入れて。習字は寺子屋と同じですよ。新聞をちゃんと切って持って来て、そしてお稽古したの。

女B..それを乾かして、どこ行くと思います？

女C..捨てないで、それを乾かしておトイレ。

女B..そう。おトイレでお尻拭くのを使うのよね(笑)。

女A..私は教科書をもらったのが中学になってからでしたね、すごく嬉しかった記憶があります。鶴亀算でも、ガリ版刷りの教科書で勉強した記憶があります(笑)。

(ララ物資とDDT思い出)

女B..ララ物資の最初の給食は、多分四年生だったと思うんです。ララ物資で食べ物を与えられたのよねえ。それで給食が始まったんですよ。

女A..最初は、トマトジュースだったの。それがもう、トマトジュースを知りませんから、気持ち悪くて飲めませんでしたね。飲んだことがないから。みんなで「血を飲むんだ」とか男の子たちが言ってたね。飲めなかった記憶があります。その後が、脱脂粉乳でした。

司会..ララって略語ですね、アメリカの慈善団体の方が、お金を集めて物資を購入して日本に送った物です。略称で頭文字だけを取ってLARA (Licensed Agencies for Relief in Asia 「アジア救援公認団体」で日系アメリカ人の「日本難民救済会」

が母体になって発足。

女E..何か歌を歌ったような記憶があるんですよね、お礼の歌を。

先生..セーターとかね、革ジャンとかね、古着をね、もう喜んでみんな貰ったんですから、焼け出されて着る物がないんですから。向こうの古着っていうのは、新品同様で良い物が多かった(笑)。

女E..格好良かった。

女B..ゴムボールですか、当時はありませんでしたので、やっぱり抽選で、じゃんけんとかでもらって、そういう物のお礼に絵を描きましたね。みんな自分の絵を描いてアメリカに送りましたね。それがお礼だって言いながら、一生懸命描いたの覚えていますけどね。

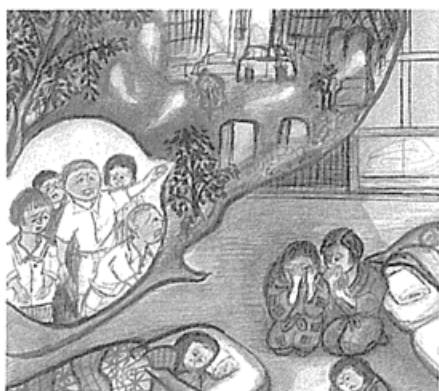
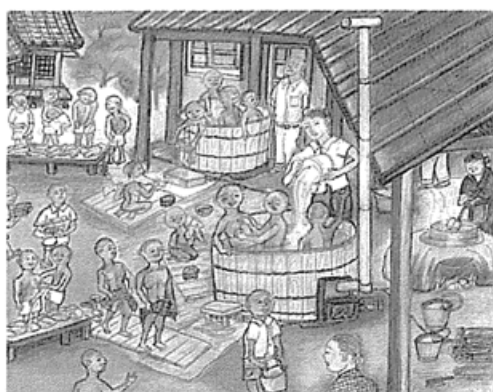
男D..DDTは凄かったよね。

女E..学校で何か一杯散布されましたね。南京虫と。それから蚤(のみ)とシラミと。

女A..シューシューシューシュー。頭から身体からね。頭なんか真っ白になるぐらい。五年生ぐらいまでかけられた。

女C..だってそれしか消毒剤がなかったの。

女B..学校だけじゃなくて家庭にもありました。



小島 義一 画

女A..みんな、虱だらけで毎日それを取るのが役目みたいね。梳き櫛とかありましたよね、先生。

先生..梳き櫛っていうのがあるんですよね。新聞をよく手に持たされてね梳き櫛で梳くと新聞紙にパラパラって一杯ね。

女B..いくら一人だけ綺麗にしたって駄目なんです。学校に行けばみんないましたから。

女B..お風呂に行くとまた貰ってきちゃいましたね。

第三部（座談会）

戦争と私

場所…高輪福祉会館

Aさん…私は千葉県の市川で生まれ、八十三歳になります。戦時中は空襲や色々なことがありました。うちの畑に爆弾が落ちて、大きな穴が開きまして、その水溜りにザリガニが住みついて爆弾池と名付けていました。終戦の時は、二十三才でみなさんが、「ああ、もう戦争負けたのよね」って、私は、絶対に日本は勝つと思っていましたから、何とも言えない気持ちでございました。

Bさん…私は、終戦の時中学三年生で十四才くらいですかね。ずっと高輪にいました。泉岳寺の辺りが五月二十四日から二十五日に掛けて焼けまして、通りを隔てて、向かい側は全部焼けました。水もないし、消防車も消すことが出来ず立ち往生したままで、本当に傍観しているだけでした。家の近くに焼夷弾が数発落ちましたけれど、みんなで消しまして運良く焼け残りました。

終戦の放送は、全校生徒が学校の運動場に集まって聞いていました。何を言っているのか内容が全然分からなくてね、

先生が泣いているのを「何でかなあ」なんて思って聞いておりました。父親がすっかりして力なく帰ってきて、「負けたんだよ」って聞いて初めて分かったのです。まさか負けるとは思っていませんもん。それが負けちゃったんでね、何ともいいない気持ちでございました。

Cさん…戦時中私は七、八才で、栃木県小山市にいました。あまり記憶に残っていないのですが、ただ、南の空が燃えて、真っ赤に染まっているのが凄い印象に残っていますね。それ以外は、あんまり記憶がない（笑）。

Dさん…父が公務員で転勤が多く、山形から東京に来て、女学校に入りました。女学校の二年生の時にアメリカと戦争が始まったんですよ。だから、「大きな国と戦争なんかして、勝つのかしら？」と思いましたけどね。段々段々と戦時色が濃くなっていくのを覚えています。中国大陸で戦争が始まって、そのうち南京が陥落して提灯行列をやっていたことなど、わずかですが記憶にあります。東京へ出て来まして、八王子の方におりました。戦争が激しくなると、勤労奉仕に行き、月月火水木金金で、もう休む暇などありませんでした。月月火水木金金と言うのは、当時の標語で歌にもなりましたが、要するに日曜日がないということですよ。

それから、四年生ぐらいになって、今の高校一年、夕方学

校が終わると勤労奉仕で兵隊さんの白衣を縫うんです。一着でも多く縫わなくちゃと思いますて、みんなと一生懸命縫うのですけど、少し遅い人などは悔しくて涙を流していましたね。五年生になると、今度は学徒動員が始まり日立製作所の立川工場に行きました。もう、その時はB29の爆撃とかすごかったですよ。B29が落ちた時は、よく見に行きました。警戒警報が始まると芋畑に逃げ、さつま芋を生でかじっていたりしましてね。工場から帰る時に、高射砲の破片で生き埋めになったこともあるんです。男子生徒の中には、生き埋めになつて亡くなった方もずいぶんいました。また、ちよつと顔を出した途端に爆風で、飛ばされた学生もいました。学校の方でも航空機の部品とかの検査の仕事もありましたね。その時はもちろんみんな真剣でしたけど、でも戦争に勝つとは思いませんでした。大きな看板に「勝った、勝った」と戦勝報告が出ていましたが、それを見ながら、空襲とか沈没したとか聞くのに「変だわねえ」って小さな声で言っていました。

ある日、アメリカ人の捕虜が重労働をさせられているのを見ていた奥さんがね、「あら、可哀相にねえ」って一言いったら、「おい、こら」って連れていかれました。絶対に何かを言っちゃいけないと、口を閉ざしていましたね。そんな時代でした。

女学校を卒業して、専門学校の受験の日に空襲にあい、艦載機の爆撃が来まして。若い男の方が、「危ないからもう動いちゃ駄目だ」って言って、大きな板切れの陰に隠れましたね。機銃掃射のバリバリってガラスを割るような音が聞こえ、アメリカ人のパイロットの顔が、もう大きく見えたんです。私は、はうようにして家に帰りました。

Eさん..私は、ずいぶん前の記憶でよく覚えていませんけど、昭和十九年に結婚しました。夫は鹿島航空隊の海軍の兵隊で四月に結婚して鹿島航空隊近くの農家の借家に疎開のかわりに父母と私で行きました。夫は鹿島航空隊に家から通っていましたよ。そして、昭和二十年三月お腹が大きかった時に、東京の方の空が真っ赤になって、それを鮮明に覚えています。四月に長女が生まれて、段々戦争が激しくなり、茨城でも空襲がありました。空襲があるたびにオムツや何かを持って、子どもを連れて防空壕まで走って逃げます。防空壕の中に入ると疲れて、もう死んでもいいわと思いましたね。夜、寝ていましたら夫が「もし敵機がこんな所まで来るようになったら、もう戦争もお終いだから」と、言いました。その後、実際に基地の飛行機の格納庫に機銃掃射があつて、それから間もなくして本当に終戦になったのです。終戦になる直前は、日本の飛行機の燃料が足りなくて、松ノ木の根から油をとつ

て燃料にすると言う話もあり本当かなと思っていたくらいです。また鹿島に疎開して来た知り合いの人の娘さんが青酸カリを職場から貰ってきて、終戦になり親元に帰る途中身に危険を感じる様なことがあったら、それを飲んで死ぬようにと言われたみたいです。そんな怖いことだけを、断片的に覚えていますね。戦争が終わったら、とにかく東京に帰りたかったですね。

Fさん..私は茨城の出身で、戦争の時は小学校高学年でした。覚えていてることというのは、学校から“どんぐり”と“桑の木”の皮を集めて持って来るように先生から言われたことがあります。それと授業中に空襲警報のサイレンが鳴りますと、みんなで学校の周りにある防空壕に入ったことなど覚えています。終戦直前にはずいぶんアメリカの飛行機が飛んで来ました。東京の空襲も見えまして、家族みんなで、「ああ、赤くなっている」「今日も東京、爆撃されているな」と話していたことを覚えています。終戦は夏休みでしたが学校に来るようになって言われて学校へ行くと、先生から「戦争は終わった」って言う話を聞かされました。それで「アメリカの兵隊が飛行機から落下傘で降りて来るから、みんな竹やりを作ってアメリカ兵を突くんだ」と。どんな子どもが狙われやすいなど

という話を聞いて、泣き泣き家に帰って親に言いました。そうしましたら、私の家は農家でちょうど農繁期で蚕の世話で忙しい時期で桑の葉摘みに夢中で「みんなもう忙しいんだから、あっち行ってなさい」って言われましてね。(笑)何か子ども心に凄く大変なことが起きたと思つて帰つて来たのに、親は仕事に夢中で、その時のギャップが未だにちよつと心の中に違和感として残っています。

Gさん..私は、新潟県の私の実家に、四歳の長男を守るために疎開しました。あんな山奥でも、昭和電工の子会社の昭和肥料と言う会社が鉾山の仕事をしていた関係で、空襲がありました。私が薪を取りに山に行っていましたら、頭すれすれにアメリカの飛行機が飛んで来て、もう怖い目に合いましたよね。終戦になりまして、東京に帰れるのかどうかというのが、一番心配でした。

Hさん..私は結婚をして、京都から今の中国の大連にきました。そして、すぐ終戦となりロシア人が大連の街にやってきました。道をうろうろ出ると危ないからと、私も二階から見ていました。その後私は近所の産婦人科の病院でお産して、夫が向かえに来てくれて、背中におんぶしてもらい家まで帰ったことが、一番目の前によく残っています。それから日本

への引き揚げが大変でした。大連の港から船に乗りましたが、荷物の大半は置いたまま残してきました。アルミの小さいやかんに子どものための水を入れて乗船しました。日本についた後も列車の中はもう一杯でね、身動きができないくらい乗っていました、ようやく深夜に京都の駅に着きました。家に着くと昔のままで、ノックをしたら家の者がびっくりしまして、「ああ、帰って来た」と迎えてくれました。夜中に誰かと思っただけで、私だったってね。寒いのに子どもに着せるものがないから、私のオーバー着せていました。今でもそのオーバーも持っています。その後、夫の大連時代の友達が赤坂にいて、私たちも東京に来ることとなりました。

ーさん..私は当時学生で日本無線という所に学徒動員で行っていました。母が長野県の穂高に疎開していましたので会いに行ったその帰りの東京へ向かう汽車の中で終戦を聞きました。戦争の記憶で一番思い出すのは、食べるものがなかったことです。

そして軍隊での朝鮮の人への扱いを見ていると日本もずいぶん悪いことをしてきたんだなあ私の心の中に残っています。

す。今考えると日本の戦争は間違っていたと思いますね。同じ人間ですから。今でも胸が痛みます。

港区の学童疎開・沼津学園

司会…今日は他の集団疎開とは少し異なった沼津学園の思い出についてお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

（当時の生活）

女A…私は、昭和十九年の五月から、昭和二十年の六月まで沼津で疎開をしていました。それから、昭和二十年六月三十日府中に再疎開し、終戦後、そうですね、一ヶ月近く府中にいました。行った時は小学校、当時国民学校の五年生です。そして終戦の時六年生です。沼津学園は非常にユニークな所だったと思います。というのは、疎開は辛くて酷い目に合ったという話ばかりですけど、私たちは相対的には、非常に良かったですね。特に始めの頃は、他の疎開に比べたら、非常に楽しいことが多かったというのが、私の印象ですね。でも、一番プラスだったと思うのは、その時に出来た友達が今でもみんなね、こうして集まります。他に、一年に一回か二

回大きな会合をやるそうですね、三十人から四十人集まってきた、今でも物凄くいい友達でいられるという、これがね、一番プラスの面だったと思います。沼津学園は別々の五つの小学校が集まり、それが非常に特徴的で、いろいろな学校の子どもが、三学年に渡って集まりました。学校が違ふことは住んでいた地区も異なり、港区という狭い範囲でも、文化が違っています。その子たちがごちゃごちゃになって一つの寮で、学園の中で生活したというのがね、非常に良かったように思いますですね。

女B…私は小学校四年の時、昭和十九年五月から昭和二十年六月まで沼津におりました。それ以降が再疎開で府中です。それで終戦を迎えて家に一旦帰り、その年の秋昭和二十年十一月頃、戦後の疎開として翌年の三月の小学校六年の卒業の時期まで、また沼津学園に行きました。そこで、まあ戦争中の疎開とは大分様子が違いますけども、やはり同じような集団生活をして、それから帰って来て、学校は、元の青南を卒業したことになると思います。ちょうど新制度が、教育が切り替わりの時でしたから、区立青山中学に行ったというような経歴です。疎開学園は、戦争の時は乃木小学校、乃木国民学校で、形の上では園長先生は乃木の校長先生です。それから

戦後の学園は、名前は戦災児学園っていうのですが、青南の校長先生が寮長先生になったっていうような次第です。

女C..私は絵がなくなっちゃってるという、赤坂小学校ですね(笑)。赤坂小学校五年生の時に、沼津に行っていました。やはり府中の方に再疎開で行ったのですが、沼津の生活があまりにも良かったので、府中へ行ってからの生活が、ちょっと耐えられなくて一週間経って父親に連れられ、当時もう家は焼けていたので千葉の祖母の里に参りました。

私たちは、楽しい思い出ばかりって言ってもいいぐらい、非常に恵まれた疎開生活をしていました。ですから、未だに皆さんと会っては“ちゃんづけ”で呼び合って、他の方たちからも、とっても羨ましがられています。

男A..私は青山国民学校の四年生で、昭和十九年の五月から昭和二十年六月までいました。ある日突然母が来て、明日から再疎開で親父の実家の埼玉県加須市の田舎へ連れて帰ると言いましたので、もう抵抗してですね(笑)、二階——、氷をしまう場所があるんですけど、そこから降りないでずいぶん困らしたことを覚えています。集団疎開とまた別に縁故疎開ですから、疎開仲間が三人くらいしかいません。あとは地元の子の中で、いわゆるいじめられっぱなしで、もう毎晩のよ

うに何で沼津から連れてきたのかって、思いました。たまたま家内が同級生で、白金の小学校から鬼怒川に集団疎開していて、今でも、なぜ沼津はそんなに仲がいいのか？ 私たちは会いたくもない、思い出したくもないのと言っています。

最近調べたのですが赤坂区の養護学園のスタッフに、我々は受け入れてもらった。東京の学校の先生は、一人も来ていませんでしたね。生徒は、全部、昨日まで喧嘩していた青南とか、赤坂とか(笑)そういうライバルばかりでしたけれども、もう兄弟のように生活させて頂きましたよ。

男B..私の場合には皆さん方とちよつと違い、在籍したのは赤坂小学校で沼津学園には、終戦後いわゆる戦災児学園だけの体験です。両親が四年生の私を、ちょうどサイパン島が陥落する昭和十九年の八月にですね、赤坂の一ツ木の叔母に預けました。その叔母の所から、赤坂区の集団疎開の今の東村山にある梅岩寺に途中から参加したんです。約三十五名ぐらいが先発で行っていた所にですね、昭和十九年の十一月に遅れた形で参加しました。集団疎開そのものは、終戦の日に同じ東村山の正福寺というお寺に越しまして、その年の十一月頃に集団疎開が解散になったわけです。町の方からも親切にされて、恵まれていましたね、そういう生活の印象がけつこ

うありました。

昭和二十一年の一月早々にですね、叔母の手元を離れ、沼津の戦災児学園に参加しました。その後、両親が昭和二十一年の七月に帰ってきました、両親の田舎のある新潟県の方に、引越しました。ですから、私が沼津にいたのは、先程、文化が違うという話がありました、確かに言葉が違うんですよ。一ツ木でしゃべっている言葉とね、それから青南のお坊ちゃんがしゃべっている言葉と、これは違うんですよ（一同笑）。それはもう微妙な差、——微妙でもないんだなあ、はつきり違うと思いました。戦後、戦災児として飛び込んだ時には、ちよつとずさんでいるなと思いましたね。昭和二十年と昭和二十一年じゃ食料事情も違いますね。どっちにしろ私にとってみれば、東村山の生活も沼津の生活も、非常に思い出深い、非常に楽しい生活でした

司会…皆さんは、どういう形で選ばれて行っただけでしょう？

女A…五校から希望者を募ったんですね。で、なんで五校かというのは、この前東京都の資料を読みましたら、赤坂の沼津の学園は建物そのものが赤坂区の所有物で、それをどこか一校に割り当てるのは、まずいのではないかということがあつ

たのではないかと思います。だから赤坂区内の小学校全部から、希望者を募ったということじゃないかと想像しますけどね。学校から紙貰ってきてですね、これがあるよと親に渡しただら、親が、じゃあ行かすかという話になったんだと思いますよ。

女D…その家庭の色んな事情があったと思いますね。私の場合は、父親が兵隊に行っておりました。それで、かなり年の離れた弟が生まれたばかりで大変だということで、親が私と一才違いの弟の二人を行かせました。

男A…私の場合は六人兄弟の四番目なんですけどね、長男も姉も、林間学校に行くわけですね。で、兄が養護学園に行っていました。で、見舞いに行くでしょ、面会に。とってもいい所なので、自分も。養護学園の募集があった時に、手を上げたら健康診断ではねられて、行けなかったんですよ。そこへ案内が来ましたから、もう喜んで参加したっていう記憶がはつきりしていますね。ですから学園に行くんですね、兄弟ねって受け入れてくれまして安心していました。

（生活について）

司会…起床五時半だという。それで朝食が六時三十分、起床

の時は片付け、床、まあ寢床の片付けですかね。洗顔と歯磨きやつて、で、神霊参拝ということをやられていますね。

女A..それがね事実そうだったのか、五時半には、起きてなかったんじゃないかな。

女D..起きてからご飯を食べるまでの間に、けっこう時間があつた記憶があります。前に神社があり階段を、何段も昇っていくのですけどね。そこによく登って、お参りをしたのは覚えています。

女A..まず起きて、秋葉神社にお参りして、帰って来て体操してましたね。

男A..乾布摩擦して。

女A..それからご飯、という日課でしたけどね。起床時間になりますと、ちょっと前からレコードがかかります。音量一杯でレコードかけまして、最後に軍艦マーチが鳴ると、次はもう、すぐ起床というのがあつて……。その時は、みんな身構えて待っているわけです。競争で、早く神社へ行ってですね、帰って来て整列するのが偉いという（一同笑）。要するに競争していますから、軍艦マーチが鳴ると、みんな身構えて待つてるといふ、そういう生活——。

女B..消灯が八時半と書いていますね。早かつたという記憶

はありますね。

男A..最後の放送というのがあるんですよ。消灯時間の八時半の後に放送でした。私はあまり、興味がありませんでしたけど、クラシック音楽のレコードがかかりました。それから、先生が童話を読んでくれました。あの当時ですから、『ノラクロ』や『三銃士』です。

女D..私が憶えているのは『森の鍛冶屋』。

男A..あと、『ボレロ』？

女D..お部屋が二十一畳でしたか？ 広いお部屋が、二つ繋がってるんですね。そこに、三年生から五年生まで、男の子も女の子も一緒に、お布団並べてそれで寝ていたもんですから、たぶん誰か一人が起きて騒ぐと、みんな目を覚ましたということばかり。各部屋には寮母さんがいて、経験が豊富な方たちばかりです。二十人ぐらいの所で、その子たちが勉強している以外の時間は部屋に帰って来ますから、全部面倒見てくださって……。

女A..当時としては、設備が非常に良かった。でも、一番良かったのは、やっぱり先生方ですね、養護学園で五、六年いらしたほんとのプロのね、しかも情熱に溢れた先生が、やつてらっしゃったということが、非常に大きいと思いますね。

女A…副園長の関先生って、実質園長なんですけど非常に情熱傾けて、子どもの集団教育というものに、俺はプロだという大変な自負を持っていた方でしたね。子どもの扱いも上手かったし、その下にいらっしゃった先生も、みんなそういう影響を受けていたわけですね。養母さんもほとんど、地元の沼津の方で皆さん非常に子どもたちを可愛がって下さいましたね。

女A…理科と工作だけは、設備がないものですから。第三小学校という地元の小学校に通いました。

女D…松寮に、「部屋よ」ということで、六年生の女の子で体も大きかったので、イトウ先生が何かの時にはちよつとこうみんなのお姉さん役をさせてくれました。だから先生とお話することも多かったし、ボタンが取れたから、そのボタンを付けるとかね、そういうようなことも、お手伝いしたという記憶があります。誰かが泣いていると「ちよつと見てやってくれる？」とか、そんなことで、まあ、母親と別れて生活しているわけですからね、そういう時に先生からそういうような言葉掛けて頂いたとかね。ほんとに慕っていましたよ（笑）、先生の思い出が、あまりにも大きすぎて…。みんなでよく手紙を出してました。

男A…泳げなかった私ですけれども、夏が終わる頃に二千メートル泳げるようになりました。海で、ま、一級、二級、三級とクラスがありました。泳げない子どもたちがね、沼津では、本当に海で強くなって。

女A…最初はね、ほんとに泳げないわけです。十メートル以上泳げるのはね、四、五人しかいなかったんじゃ……。それが九月の始めぐらいまでには二千メートル、三千メートル泳げるようになったっていうのが、それが先生の誇りでもあった。我々もそれで大変自信が付きましてね、みんな言うんですけれども、再疎開なんかしたりしても、「俺は二千メートル泳げるよ」って言うと、その、いじめが止まるっていう――（一同笑）。

男A…潮の流れがあるのね、海ですから。

女D…ほんとに、私はちよつとだけ泳いでたんですけど、中耳炎にかかりましてね、それで結局みんなと一緒に泳げなかったんです。それが悔しくて、一生懸命泳ぎの練習をしたりして（笑）。皆さん海で浮くってこともあるけども、漁師のおじさんたちが私たちの周りを危なくないように囲んで、そういう安心感もあつてのびのび練習が来たんじゃないのかなって思うんです。きれいな海が、今何か堤防が出来ちゃって、

もう、すっごい寂しいですね。

女D..男の子たちは手旗もそうですし。私、弟がやってたせいかね、ハーモニカで、トンツートン、ツートントントンとかってね。男の子ってそういうのけっこう興味を持つ子が多かったですね。

男B..戦時中だったからね、だから強制されるとか何とかではなしにやっていたね。だけど、洗面具ひっくり返してペーゴマやったりもしましたね。

女A..メンコはね、牛乳のふたでしたね。

女A..丁度、正月の時にね、ミカンがいっぱい近くで出来るんですけども、十個ずつかなミカンを貰いましてですね、それを賭けたりしていました。

女D..皮ごと食べたりとか、あと乾しという火鉢だとかで暖っためると、甘くなるとか言って、そんなのも。今で言う珍品ですね。(笑) 食べたのを憶えています。

女A..当時の、全国の学童疎開の子どもにですね、皇后様からのお菓子として恩賜のビスケットをもらいました。

男B..東村山の方はね、通ってた小学校っていうか、あちらの生徒さんにもみんな分けてたらしいんですよ。だから一人頭二枚とか三枚ですよ。こっちは三十人とか四十人でしょ

う。あちらの方は学校全体で二千人ぐらい……。

(両親との面会)

女A..最初は月一回。その後、面会日そのものが減ったのと、面会来てくれなくなったね、戦争激しくなってから。差し入れはありましたけど。隠れて食べていた人もいました。

女D..全員が面会に来られるわけではないんですよ。面会日ってね。

男A..楽しいっていうのは演芸会、学芸会ですよ。正月から始まって、節句だとか雛祭りだとかね、もう何かにつけては学芸会があるんですよ。先生も一緒にやってね。そこへ慰問団も来たりしていました。

女A..戦後慰問団というのが沢山来しましたね。資料見ると、あれはお国が東京都とかで結成されて回っていたんですね、勝手にボランティアでやってたんではないんですね。プロのアカーデオンだとか、歌手だとか、詩人の人が来てくれて、年中やりましたね。

女B..戸川幸夫先生も、いらっしやいましたね。

女A..怪談が大変上手な先生ですね。

女D..肝試し会ってやりましたね。(笑) 胆試し。海岸の方に、ここは焼き場(火葬場)だったんだよって、首吊りの松とか

(一同笑) 色々ありましたよね。そういう所を通らないと行けないわけです。ボート小屋の傍へ行くと戸川先生が懐中電灯(笑)。

男A・・「おねしょ」が一番多い日ですね、そういう時は(笑)。

女A・・疎開が終わって帰って来て、杉並の小学校へ入った時。十一月でしたかね、入った最初の日に教科書に黒く墨を塗られました。小学校六年生でしたから、六年生だともう分かれますからね、大変なショックでしたよ。今でも人の言うこととすぐ信じられない。あれは凄いショックでしたね。先生を恨むとかそういうことは無いですが、こんなバカなことをと、前の教科書をけなして「これは、軍国主義だから駄目だって」非常に悪く言われると、子ども心にも、この先生戦時中どうだったんだろうと、大変な不信感を覚えましたね。

男B・・私は戦後ですが、一番感謝しているのは、学園の庭ですね、先生が塩作りをやったんですね。ですから海水を薄めて塩、要するに物々交換して我々に食わしてくれたという話ですね。まあちょっと出来ないことじゃないかなと思うんですよ。

女A・・自分の家族よりね、我々のことを大事にしてくださいね。もう、肌身に感じてます。家族を放り出して、留守に

していたわけです。先生は、ご自分の子どもたちに可愛そうなことをしたと、ご自身で書かれています。

女D・・うちは赤坂の戦災で兄と叔母が亡くなりました。兄は一つ違いで、疎開先から、中学を受けるために戻って来てました。中学に入学して、親がほんとに喜んでました。それが、五月二十五日の空襲で亡くなりました。中学生生活一ヶ月半です、それで亡くなってしまいました。私は、沼津におりましたから、兄の死に目には遭っていません。両親は兄を心配して疎開させて、帰って来て、喜びもつかの間の死ですから、その落胆振りは、想像するに余りありますね。

女A・・B 29は最初の頃、伊豆半島の先、御前崎の方から富士山目がけて来るんですよ。で、丁度我々の上で東に旋回して東京に向かいます。これから、東京に爆弾を落とすんだと思いながら上を通るのを見ていたわけです。丁度ラジオで、敵は伊豆半島の南端に到達し、富士山に向かって北上中と。ラジオで放送していました。

女D・・防空壕掘って、松林の中に掘って、防空壕に入っていましたね。

男B・・昭和二十年の四月の二日に、東京の西部地区に対する、爆弾による空襲があったんです。私のいた府中の梅岩寺とい

うお寺の、私の寝ていた軒先、そんな離れてない所に落ちました。ちよつとそれていたら、もうほんとに即死だったのじやないかと思っています。

女A..疎開をした一番プラスの面はね、子どもたちが、沢山死ななくて済んだことですね。これはね、やつぱりよくやったと思いますね。要するに、戦局が厳しくなってきたという条件を先において考えれば、もう疎開しかないということですね。期間がない中で、よく疎開を実施したと思います。

女A..本土決戦でなくてよかったですよ（笑）。

司会..ほんとに今日は、色々とお話をお聞かせ頂きまして、ありがとうございます。

第三部（座談会）

戦時下での出産、子育て

（戦後四十年当時の資料から）

場所：西麻布福祉会館座談会

女A..当時、麻布の今井町にいました。産み月でね、予定日を十日くらい過ぎてました。三月十日、六本木も直撃受けてハツと見たら六本木が燃えているんでそれから逃げ回ったの。氷川さんのほうに米なんかいっぱいつめて身の回りの物を持って玄関飛び出したでしょ。転んじやったの。大きなお腹して。やっと避難所へ行ってなんとか免れ、夜が白々と明けて家に帰ったんです。そしたらお腹痛くなつて産院へ飛び込んだの。分娩室に入ったら看護婦さんが話してんの。「いざとなったら患者さんなんか放っておいて逃げましょうね」って。ひどいでしょ（笑）。空襲の翌日無事に生まれたの。女の子。アカザとかかぼちゃの蔓（つる）とか食べたわね。最低なのはね、うどん粉をつなぎにしてぬかを食べたこと。パンみたいにしてフライパンで焼いて、苦いの。

女B・・池袋に弟がいて麻布から大八車に嫁入り道具からたんすから何から積んで。荷物を全部運びました。それを今度は八王子に運んだのよね。十九年から二十年の終戦の日まで二十回くらい八王子を往復しました。運び終わったら終戦になっちゃった。子どもを消化不良で亡くしてしまい、八王子の村役場に山の中を泣く泣く歩いたわね。もう悲しくって。

運んだ荷物は桐のたんすだの着物もみんな売っちゃった。食べ物に化けちゃったかしらね。八王子へ行く時、焼けた米屋さんで大勢の人がまだ燃えている米を拾っているのを覚えています。



小島 義一 画



小島 義一 画

港区戦争体験記録集 用語解説

* 赤紙 「召集令状」を参照。

* 慰問袋 出征兵士を慰めるため、地域の婦人会や学校単位で中に日用品や菓子、娯楽品、励ましの手紙などを入れて送った。

* MP (Military Police) 米軍の警察、憲兵のこと。

* 学徒出陣 戦局の激化により、主に文科系の大学・高専生徒の徴兵猶予が停止されて戦地に送られた。「神風特攻隊」員として命を落とした学生も多かった。

* 学徒動員 学生、生徒を対象に行われた勤労動員のこと。昭和十九年の学徒勤労法によって始められた。軍需工場などへ動員された。

* 学童疎開 (縁故疎開・集団疎開) 戦争末期、都市の国民学校の生徒を空襲の危険から避けるために強制的に農村部へ移動させたこと。東京からは約二十万人が疎開した。しかし疎開先の食糧事情は悪く、栄養失調やシラミに悩まされた。他に親戚などを頼った縁故疎開と学校ぐるみの集団疎開とがある。

* 艦載機 軍艦に積載される航空機。ふつう航空母艦に搭載するものを艦上機というのに対して、軍艦に積む航空機をいう。

* 機銃掃射 機関銃の銃口を動かし敵をなぎ払うように射撃すること。艦載機からの機銃掃射を受けた例が多い。

* 教育勅語 明治二十三年に天皇から国民にむけて発布された「教育ニ関スル勅語」のこと。国民の守るべき道徳、基本精神として忠君愛国の精神を中心に説いたもの。終戦に到るまで、学校教育の支柱として子どもたちに教えられた。

* 強制疎開 空襲、火災などの被害を少なくするために、建造物や人などを、所有者や本人の意思を認めないで分散させること。

* 玉砕 名誉や忠義を守って潔く死ぬこと。アッツ島で日本軍が全滅して以来、軍部は全滅を玉砕と呼ぶようになり、敵に降伏するよりは玉砕するよう強要した。

* 玉音放送「終戦の詔勅」といわれる天皇自らの声による放送のこと。昭和二十年八月十五日正午から重大ニュースとして、ラジオを通して国民に伝えられた。

* 金属類回収令・金属供出 戦争の長期化に伴い、政府は軍需物資としての鉄、銅を確保するために金属類回収令を昭和十六年九月に発動した。これにより、神社、寺院、教会等の鉄、銅製品の回収が実施され、一部では鉄道の線路まで供出された。戦局が厳しくなってくると鍋や釜までがその対象となった。

* 勤労働員 戦地に働き手となる男子が送られたため、労働力が不足した農村や工場に十四歳以上の男女が勤勞奉仕する義務が昭和十六年に法制化された。強制的な無償労働で、隣組や学校などを通して提供させられた。

* 空襲警報 敵機の来襲が確実となったときに鳴らすサイレン。戦争末期、爆撃が激しくなると、空襲と、警報がなるのことが同時のことも多かった。

* 軍事教練 大正十四年から、学校で学生・生徒を対象に行われた陸軍将校による軍事に関する訓練。昭和二十年に廃止された。

* 軍需工場 戦争に必要な武器、弾薬、航空機、車両などを製造・加工する工場。

* 軍属 正規軍人ではないが、軍人に準じて戦争遂行のためのさまざまな任務にあたった人の総称。

* 警戒警報 敵機の来襲は確実であるがどこを攻撃するかはまだわからないとき、進行方向の地域で鳴らしたサイレン。

* 警防団 戦時中、地域の消防や防空などのために組織された団体。従来の防護団と消防団が警察署単位に統合された。

* 行軍 軍隊用語。軍隊が隊列を組んで遠距離を移動、行進すること。

* 高射砲 航空機を射撃するための大砲で空中で弾丸が炸裂する。高高度を飛ぶB29に対しては弾が届かなかった。

* コーリヤン 中国産のもろこしで、米の代用品として配給されることがあった。

* 国民学校 昭和十六年公布の国民学校令により尋常小学校を国民学校に改称した。皇国民の基礎的訓練を目的とする初等教育機関と位置づけられた。

昭和二十二年まで存続。国民学校は一〜六年生で、その上に高等小学校に相当する、二年間の教育課程の高等科もあった。

* 国民服 国民が常に着るべきものとして、国民服令によって昭和十五年に制定された服のこと。軍服と同系色でなかなか普及せず、昭和十九年ごろになつて広く男子に着用されるようになった。

* 五、一五事件・二、二六事件 第一次大戦後の経済恐慌を打破するため、大陸侵略と軍国主義化を目指した青年将校らが首相官邸、日銀、警視庁などを襲撃し政府打倒をねらった事件。昭和七年五月十五日と、昭和十一年二月二十六日におこった。

* 国賊 戦争や国家に対して批判した人をこう呼んで非難した。また非国民とも言った。

* 国家総動員法 戦時（事変）に際して「人的及び物的資源」を統制・動員・運用するための法律。一九三八年（昭和十三年）四月一日公布、五月五日施行。

* 在郷軍人 ふだんは民間で生業に就いているが、戦時には必要に応じて召集され国防の仕事をする予備役・後備役などの軍人。

* 出征 軍隊の一員として戦場に出ること。

* 絨毯爆撃 絨毯を敷き詰めるように無差別にある地域の一帯を爆撃すること。

* 焼夷弾 燃えやすい焼夷剤（重油・揮発油など）を入れた爆弾。東京大空襲の際にも多用された。焼夷剤の種類によって油脂焼夷弾、エレクトロン焼夷弾、黄燐焼夷弾などがある。

* 松根油 戦争末期、航空燃料の不足を補うため、松の根からとれる油を使おうと、子どもたちまで動員して松の根が掘られた。しかし実際にはほとんど役に立たなかった。

- * 照明弾 夜間の攻撃、飛行機の離着陸、偵察のために、地上の闇を数秒ないし数分にわたって照らす砲弾。
- * 召集令状（赤紙） 兵隊を招集するための令状のこと。この紙一枚で国民は兵役に応じなければならなかった。令状の色が赤だったので一般に赤紙とも言われた。
- * 進駐軍 占領軍の事。旧指導者は敗戦の衝撃を少しでもやわらげるため、占領軍といわず、進駐軍といった。
- * すいとん 小麦粉を水でこね、汁で煮込んだ食べ物。戦争中食べ物不足し、その応急策として主食の代用として食べるようになった。
- * 戦災孤児 戦災で両親を失い、身寄りのなくなった子ども。収容施設も作られたが、終戦後行き先を失った戦災孤児が浮浪児として駅舎、地下道に集まり社会問題となった。
- * 千人針 戦場の無事を願って、木綿の布に赤い糸で千の結び玉をつくって弾よけのおまじないにしたもの。慰問袋とともに出征兵士に贈った。
- * 代用食 米や麦などの代わりに食べる食品のこと。特に米の代わりにする芋類、麺類など。
- * 大本営 戦時中に設置された天皇直属の最高戦争指導本部。
- * 建物疎開 空襲のとき、火災による被害を少なくするために、人口密集地や軍需工場周辺の建物は強制的にとり壊された。
- * 徴用 戦時中、国民を軍需工場などに強制的に動員し、働かせたこと。
- * （女子）挺身隊 女子勤労挺身隊のこと。戦局悪化による労働力不足を補うために、男子にかわって、十四歳以上二十五歳までの未婚の女子も軍需工場などで働いた。
- * DDT 進駐軍が戦争で混乱した日本の衛生状態改善のために散布した薬品。当時、身体についたシラミなどを退治するために、頭から白いDDTの粉末をかけられた人も多かった。
- * 燈火管制 夜間の敵機の来襲に備えて爆撃を避けるため、各家庭では、窓や電燈を布などでおおって、戸外に光がもれないようにした。
- * 隣組 昭和十五年、国民を統制するため従来の町内会活動を基盤に十軒くらいを一単位としてつくられた地域組織。戦争遂行のためのさまざまな指示事項の伝達、互助、自警、配給などにあたった。昭和二十二年に廃止された。
- * 日支事変（日中戦争） 昭和十二年の満州事変から日本の敗戦まで続いた、日本と中国の戦争。当時の日本では中国を支那とよんでいた。
- * 配給制度 統制経済のもとで、特定商品の一定量を、特別の機関や方法によって消費者に公平に売ること。
- * B 29 ボーイング29の略。米軍の大型戦略爆撃機で当時、最大の長距離爆撃機。広島、長崎に原子爆弾を投下した爆撃機。
- * PX (Post exchange) 終戦後、進駐軍とその家族のために設けられた買い物施設。酒類の他に、衣類、食糧、日用雑貨などがおかれていた。
- * 奉安殿 第二次世界大戦中まで、各学校で天皇・皇后の写真（御真影）や教育勅語などを収めていた建物。小さな神社のような外観で、台座の上に載せられている。
- * 防空壕 空襲の被害をさけるための穴や地下室。各家庭が庭などを利用してつくり、空襲警報がなると避難した。しかし必ずしも安全だったわけではなく、直撃の不安をかかえてじっとしているしかなかった。

＊満州事変 領土拡張をねらう日本軍が満州鉄道を爆破した柳条湖事件に始まる満州への侵略戦争。日本は翌年満州を独立させた。昭和十二年には宣戦布告をしないまま全面的な日中戦争へ突入し、昭和十六年、太平洋戦争へと拡大した。

＊満鉄 南満州鉄道株式会社の略称。明治三十九年創設され満州で鉄道経営を主として、植民地経営の基盤を担った大企業。

＊ヤミ市 配給制などによる物資の統制により、食糧や日用品が極度に不足したため、正規の配給ルートを通さずに手にいれた品物を売る店が、多くの人利用された。敗戦と同時に都市の駅前などで始まった。東京では上野や新宿、新橋などに大きなヤミ市があった。

＊罹災証明 空襲で家を焼かれた人たちに発行されたが、この証明書があっても日用品の支給は充分にうけられなかった。罹災者の増加により、その救護対策に困った政府は、罹災者の集団疎開を推進した。罹災者が疎開先への切符を買うのにも必要だった。

＊榴弾砲 爆風、破壊および破片効果を与えるために使用された。大量の炸薬を充填してある弾丸をつめた砲弾。

平和への願いを込めて(第二集)
— 今語りつぐ戦争の体験 —

協力

全国疎開学童連絡協議会

昭和館

東京都

東京都復興記念館

毎日新聞社

平成十九年三月三十一日発行
平成二十年七月 三十日二刷

発行

港区総合経営部人権・男女平等参画担当

〒105-8511 東京都港区芝公園一―五―二五

電話〇三(三五七八)二二一一 内線二〇二五〇二七

発行番号

20049
―
1511

